

平成28年度 第1回那覇市総合教育会議議事録

署名人 本仲 範男

市長 城間 幹子

1 開催日時 平成29年（2017年）1月19日（火）10時00分～12時00分

2 開催場所 那覇市役所10階 1001会議室

3 出席者 城間幹子那覇市長

那覇市教育委員会：神村洋子委員長、本仲 範男委員、饒波正博委員  
比嘉 佳代委員、渡慶次克彦教育長

4 協議事項

- (1) 子どもの貧困を支える財政的な支援について
- (2) 地域の中の子どもの居場所、居場所運営事業等 の取組みについて
- (3) 学校現場から、子ども寄添支援員・むぎほ学級 の取組みについて

5 出席職員

生涯学習部：伊良皆部長、屋比久副部長

（総務課）山内課長、佐久川副参事、金城主査、幸地主査、伊禮主査

学校教育部：黒木部長、森田副部長、神谷教育相談課長、泉主幹

こどもみらい部：浦崎部長、子育て応援課課長、当山副参事

福祉部：野原副部長、川端参事兼保護管理課長、崎枝副参事

6 事務局職員

企画財務部：渡口部長、仲本副部長兼企画調整課長

（企画調整課）坂田副参事、佐々木主査、天久副参事

7 傍聴人 0名

8 議事の経過 次のとおり

城間市長

はいたい ぐすーよー ちゅーうがなびら。本日は平成28年度の第1回那覇市の総合教育会議にお集まりいただきありがとうございます。昨年度、今、先程、企画部長のほうから説明がありましたが、2回に亘って本市の教育をどうしたらいいかということで、色々なご意見を頂戴しました。今、思い出しても活発な意見交換が出来たなあと思っております。今後も皆様と本市の教育の方向性など議論を交わしながら本市の教育の向上に努めて参りたいと考えております。どうぞ、皆さま方、忌憚のないご意見を本日はいただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

それでは、本日の協議事項に移りたいと思ひます。本日の協議事項は1題です。「こどものみらい応援プロジェクト ～子どもの貧困対策～」についてとなっております。進め方について確認をさせていただきます。最初にこどものみらい部がこどもの貧困を支える財政的な支援について、2番目に福祉部のほうで「地域の中の子どもの居場所、居場所運営事業等の取組みについて」、そして3番目に、「学校現場から子ども寄添支援員・むぎほ学級の取組みについて」、学校教育部の教育相談課のほうから説明をさせていただきます。各部局の説明が終了した後に意見交換をおこなって参りたいと思ひます。一つずつやるとどんどん長引いていきますので、一気に説明をさせていただきますと思ひます。では、まず初めにこどもみらい部より、今年度の取組の現状、それから進捗状況等について説明をしていただきます。よろしくお願ひいたします。

こどもみらい部 \*配布資料に基づき概要説明

城間市長 それでは、次に福祉部のほうですね。今年度の取組の現状と進捗状況などを説明していただきたいと思ひます。お願ひします。

福祉部 \*配布資料に基づき概要説明

城間市長 よろしいですか。はい、福祉部のほうから報告でした。引き続き、学校教育部お願ひいたします。

学校教育部 \*配布資料に基づき概要説明

城間市長 3部担当課の皆さんからご説明をいただきました。ありがとうございます。さて、後の時間は皆様から、まず、ご質問をいただき、そしてご意見もいただきながら、深めていきたいと思ひます。よろしいでしょうか。それでは、まず教育委員の皆様からのご質問を受けたいと思ひます。

饒波委員

2番の資料の5ページなんですけど、実は教育委員会で勉強会をやった時と同じ資料なんですけど、その時には気付かなかったんですけど、生活保護世帯の高校への進学率なんですけれども、平成27年度ですか。これちょっと、見落としたんですけど、

今、この質問です。

城間市長  
饒波委員

わかりました。5ページの、平成27年度が、率が下がったということですか。

そうです。平成26年度までは順調に上がっていたんですけど、平成27年度は下がっているんですけど、これはどうしてでしょうか。

城間市長  
福祉部

答えていただけますか。はい、どうぞ。

個の子どもによって、その子の状況が違うわけですがけれどもその支援に至るまでに問題が大きくなっている子どもが居るんですけども、なかなか支援が難しい、ですから、平成26年度は支援をして、効果的に吸収してくれる子どもが多かったんですけど、その時は、平成27年度については、やっぱりそれまでに問題を蓄積していて、支援をしてもなかなか高校進学まで行けなかったという子どもが多かったということです。

城間市長

多くの抱えている状況の違いだと思うんです。比較というのは全体的に良くなっているという部分を捉えていただきたいと思います。はい、どうぞ。

福祉部

中学生の支援も学習支援教室でやっているんですけども、そこに来るまでに、かなり問題が大きくなっているんですけども、根が深くなっている子どもが沢山います。主に家庭環境に問題がある子どもです。生活保護世帯の場合にですね。精神疾患にかかっている方が、非常に率が高いです。生活保護を受けていらっしゃる方は市内全体で2万2千人以上いるんですけども、精神科のほうに通院したり、入院している子が、2,500名、かなり一般世帯より高い、そういった障害がある、傷病を持っている親御さんに育てあげられて、食事もちゃんと取れないとか、生活習慣が一般世帯と比べて問題を抱えているというものがいますので、そういった個々の子どもの状況に応じて、どうしてもこの4月に変わってくると思われま。

城間市長  
饒波委員

関連して、はい、どうぞ。

本日、ちょうど提案したいことが凄く感心ごとなんですけど、今の回答と一緒に絡めて、お話をしたいと思うんですけども、沖縄の提案は凄く単純でですね。支援するのであれば、より若い時に支援したほうが良いのではないかということ。中学生よりも小学生、小学生よりも、もしかしたら就学前、問題は恐らくその時から抱えているはずなので、早くから対応すればなかなかこじれないかも知れないということ、只、保護課の方も勉強会の時におっしゃっていたんですけども、対症根治療法という言葉でおっしゃっていたんですけど、対症療法、中学になってその問題が……の処置というのは凄く大切だと思うんです。これはこれでやるべきだと思うんですけども、那覇市の貧困に対する戦略的な方向として、より若い人達から支援していこうという方向を、勿論、県のですね、貧困対策計画でもライフプランに合わせた、要するに、生まれた時から大人になるまでのサポートということを謳ってはいるんですけども、那覇市はよりそれを戦略的に、若い時、中学よりも小学、小学よりも就学前

というような戦略で、立てていったほうが良いのではないかという提案で、後は皆さんで議論していただきたいんですけども、そのうちの説明資料(2)を見ていただきたいんですが、1ページ目の支援員の配置状況なんですけれども、(1)番・(2)番・(3)番・(4)番とありまして、(1)番は教育委員会がやっているもの、(2)、(3)が保護課、(4)が子育て支援ですね、こどもみらい部がやっているんですけども、恐らく、那覇市の人口は、それ程、出入りが無いとして、問題は、就学前から抱えてはなんですけれども、支援員の配置が、(4)番の子育て支援員がお1人なんです。1人で、教育委員会の勉強会の時に、こどもみらい部の説明ではですね。自立支援員が1人で、相談員が7人ということでその7人共ですね、大体、案件の1人80件~100件位、書いているというんです。そうすると全員で抱えているのが560件~700件、保護課が抱えている件数が500件と言いますので、ほぼ同じとか、まあ、保護課は人の数ですね、こどもみらい部は件数です。単純に比較は出来ないと思うんですけども、同じくらいの問題は恐らくあると思うんで、この人員の配置にしてもやはり左側の多いかなという感じが、多くはないんです、右側が少ないということですね。そちらに力を入れていく戦略もありなのかなということ提案して、皆さんに議論していただければというふうに思っています。

城間市長            ありがとうございます。1人の役目はスーパーバイザーですか、そうではなく。

こどもみらい部    そういうことではないんですけども、もう少し、饒波委員からもありましたが去年は元々就学前の子どもで・・・支援員、相談員の皆さんが7人いるので、今回、この事業を使って、お1人、もう1人増やしたということで、言葉の類でございまして、お1人だけがこうやっているということではなくて、只、勿論、それで充分かどうかというのは、いろいろご議論があると思いますが、そういう数字的にはそういう数字であります。

城間市長            はい、解りました。ご意見をいただきました。ありがとうございます。そのほかにありますか、はい、どうぞ。

本仲委員            今、説明を聞いて正直な感想なんですけど、これまで学校現場に居たことからしますと、那覇市の市長部局、それから教育委員会が、いわゆる子どもの貧困対策について、具体的に動き出して、かなりダイナミックな動きが出てきたなということを感じて非常に心強く思っている所です。それから、この中で、ちょっと確認して、評価したいんですけども、説明資料(2)のですね。5ページ、先程の饒波委員と関連するんですが、高校進学率が平成22年度~平成26年度にかけて、今度は高くなっていくということで、やっぱり支援の効果が表れてきたというふうなお話をされていたわけですが、これは全く同感なんですけれども、こういうふうな結果が、効果が、内閣府が評価をして、10億円の補助が出たというふうな説明があったと思うんですが、この辺は凄く数量的に示して効果性を表すのは、凄く可視化するのは非常に大事な事だな

というふうなことを感じました。後1点、よろしいですか。

城間市長  
本仲委員

はい、どうぞ。  
この説明資料(1)の8ページ、こどものみらい応援プロジェクトの情報交換会が開催されているわけですが、この資料を見ますと、かなり効果があったように感じているんですね。それでお互いに活動している同士が横の連携を取って、今後の活動につなげていくということで、非常に良い取り組みだなというふうに感じているんですけども、この情報交換会の中に学校現場の方達の対象が入っていないわけですが、これは、全く学校の、学校というのはプラットホーム化して、これからもかなり、いわゆる、子どもの貧困については関連が出てくると思うんですが、これは学校現場の先生方は、教頭先生が発表されているんですが、いわゆる教員の先生方は参加しているのか、どうか、対象外なのか、どうか、今後ともなのかということですよ。これをお伺いしたいと思います。

城間市長

はい、どうぞ。こどもみらい部ですか。

こどもみらい部

今回、この情報交換会を開催するにあたって、いろんな対象の段階で企画を考えたんですけども、実際、支援員を配置して動き出して、年度の途中からは、その地域の自治会だったり、NPOさんの方々も、広く、広い市民の方々が興味を持って、この事業に参加をして、思い思っているような活動をされているという方が広がってきた時に、まずはこの実際に活動している、したいと思っているけれど、まだ何ができるかわからないという、こう思い思った人達というか、実際にやっている人達を集めてまずは意見交換をしてみる、その中で地域ごとの連携が深まって行けば、よりその地域、基本的には地域という単位で考えていましたので、活動が広がっていけば良いなという形で、今回は特に支援員さんだったり、実施している方々だったり、民生委員さんだったりという形で、声掛けをさせていただきました。後、今後はその現場の先生達にも入っていただけるなら、より広げていきたいというところもあるんですけども、今回は場所の設定と、さっき言ったような、実際に今やっている人達が、何を今やっていて、実際にどういう活動をして、何が困っているのか、どういったことが、何が問題なのか、というところで開催をしたいと思いますので、今回は支援員、居場所事業の実施者、又は活動したいと思っている市民の方々を優先して実施したというのが実情で、只、今後については、これをより広げていきたいと考えておりますので、勿論、学校の先生方にも声掛けをさせていただいて、実は入っていただいてより広げていきたいとは考えております。

城間市長

よろしいですか。

本仲委員

はい。

城間市長

実は、私も参加させていただいて、冒頭の基調講演ということで、お話をさせていただきました。その際にも申し上げましたのは、学校がまずはスタートの場所である

こと、それで先生方にもその子どもの、児童理解、生徒理解の前に顔色を見て、状況を見て、表情を見てということをやるので、そこから情報が来るのがいちばんスタートだということで、お話をさせていただきました。ですから今、担当からありましたように、今はこの段階ということで、その後は広げていくという形に、勿論、それを考えられると思いますということで、私もサポートしたいと思います。はい、どうぞ。

本仲委員

関連して、これ交付金というのは、平成33年度までというのは、6年間の時限制度ですよね。学校現場というのは、こういう交付金というのは6年間の時限制度であるということを見ると、その後はどうなるのかなというのが、純粋な質問、感想だと思うんですよね。今の話をどうしてしたかと言うと、説明資料の(1)の7ページに、那覇市こどものみらい応援プロジェクト推進基金というのが出来上がりますよね。こういうふうにして、切れ目のない支援が継続されるんだというようなことを、学校現場の先生方は知るべきことは、とつても必要だと思うんですね、ですから私はこれを聞いた時に、例えば学校の公文章の中に、担当の一人をおいて、そしてつなげていくと、そうすると各学校、小中学校の現場の先生方の中にこういう周知が広がっていくんじゃないかなというふうに思うんですね。公文章の中に一人担当を居続けてはどうかと、子供の貧困対策というのは、学校現場の人も大変重要な課題ですので、これ位の重要性はあると思っています。

城間市長

はい、ご意見いただきました。今の件は、学校教育部のほうで、少し一言、お願いします。はい、どうぞ。

学校教育部

只今の件につきましては、非常に正しい提案かと思っております。只、現在、学校長をはじめ、そういう話題が、まだ全然上がっていない状態でございますので、今後、校長連絡協議会等で少し話題を提供しながら議論を深めていきたいと考えております。

城間市長

校長連絡協議会は毎月あります。はい、どうぞ。

神村委員長

教育委員会の学務課のほうで、就学援助についてはだいぶん努力していることを認識をしてきました。この貧困対策が始まって、その就学援助のほうを主に伸ばしているという県の政策もありますよね。その辺からすると、この1年間で那覇市がどのように変わりましたかということ、一つ、現場が家庭訪問をなくした学校が結構ありますよね。これが一つ。これまで、それから、子ども見て、毎日、日常的に見ていけばわかりますけれども、先程、おっしゃった、学校でどのように教師が動いているかということについて、教師に理解が充分になっているかどうかというのが、とても気になります。校長連絡協議会を通してということもありますけれども、十分に認識をして、教師が動くとかだいぶん違ってくるのではないかなと思うんですね。ですから、学校がプラットフォーム化する為には、どうしても教師の見る目とかですね。つなぐ心とかですね。そういうのが必要になってきますので、教師のそういうのを高めていく手段を少し具体的に考えたらどうかと思いました。

城間市長 はい、どうぞ。

学校教育部 只今、ご意見をいただきましたが、大変、私共も家庭訪問の実施等について、今、減少しているというのは理解しています。只、教育・家庭の編成権は学校長でございますので、まあそのあたりについては、私のほうから家庭訪問を実施したほうがよろしいですよと言うことは申し上げたことはございません。只、現在、先程、説明がございました、寄添い支援員等が各中学校校区で盛んに動いていただいております、先生方と学校長と共有を始めている所でございます。そこらあたりの推移を見ながら、家庭訪問が今少なくなっているという現状も併せて今後どうしていけばいいのかいいのかというふうに考えていきたいと、私どもとしては感じています。

城間市長 はい、どうぞ。

神村委員長 教師がですね。私は教師の目だと、一番大事なものは日常的に見る教師が、少しでもそういうことに認識があって、つながなければいけないとかね。どうにかしなければいけないというふうなことを考えることによって、全然現場は変わってくると思うんですね。その辺を開拓といいますかね。心を耕して行ってほしいと、現場の、そう思いますね。

学校教育部 わかりました。

城間市長 はい、ほかにありますか。はい、比嘉委員、どうぞ。

比嘉委員 資料(2)の、先程、饒波委員がお話した高校進学率の状況のことで少し関連するかなと思って、お聞きしたいんですけども、男子の進学率は凄く伸びているんですけど、女子の進学率が今一伸びないというのは、やっぱりその進学先が少ないのかというのと、もう一つは、私達、保育現場で一番感じる、母親の若年化につながっているのかというのが一番疑問と言うか、これから取組まないといけない課題かなとは思っています。女子に対しては、その進学の指導とまた別に妊娠して子どもを産むということがどういうことなのかという指導も併せてしないと、こちらは卒業してからの率なんですけど、やっぱり途中で妊娠をして、卒業をしてというのが遅れていたりとかが出てくるのかなと思って、その部分のその今後の課題というか、改善というかってのを議論していただけたらなと思ってはいます。我が施設でも、母親の若年化やステップファミリー、何とかのステップファミリーが多くて、母親としてどうしていいか学んでいない母親が凄く多くて、子供を抱きしめることすら知らないカットというお話をする子も、お母さんも居てですね。やっぱりそういった部分で、保育現場でもその饒波委員がおっしゃったんですけども、もう少し早いと思います。支援が、細かい支援が必要だなと感じています。親になるにはどうするかと言う、親の仕事はどうなのかと言うのも、もっと基礎的な部分を教える必要があるなと思って、只、保育士がそれをやるということを考えるには、保育士も若年化して行ってですね。家庭を持っていない、子供も持ってない独身の保育士が、若年の保育士が増えてです

ね。保育士も寄添えない状況が非常に出てきているので、私たちが今やっているのは、保育士と支援員の心の教育を始めています。親に寄添うというのはどういうことか、親を持つということはどういうことかというのを、同じ職場にそういった環境が無い。働くお母さんが居ないという環境の中で、自分たちがどう寄添うかというのも指導していて、親御さんへのどう寄添うかというのをやっているの、やっぱりそういった形でいろいろな場面で若年化とか、その独身かとか、女性が仕事をして定着して子育てをしていくことに寄添えない部分がやっぱり多いなと思っているので、それは教育の部分から少しずつやっていかなければいけないなというのは、課題としてもまざまざと見えているので、それにパーソナル的な部分、発達障害の部分というのがまた分かれていますので、教育が全く変わってくるので、そういった部分も含めて多角的に教育していかなければいけないというのが、今、課題になっているので、これが貧困とつながっているだろうと思う。やっぱり思われる部分が非常に多いので、凄くもう少し早めの手当というのを今後は考えていかなければいけないというのは、保育現場や支援現場からも明らかにここ数年出てきている所です。

城間市長 希望がみえてきたような、多角的に見る視点、それからライフステージも、出来るだけ早いほうがいいと、早期というのもなんですか。多角的に、それから早期に手当てをする教育支援が必要だということ 키워ードとして見えてきたかなというふうに思います。おっしゃるとおりですね。ほかに、ご意見、ご質問合わせて。はい。

渡慶次教育長 国の予算、県の予算を十分に活用して、いろんな事業をやっていて、非常に安心をしているんですけども、貧困家庭を解決するには非常に難しい、時間がかかる。只、貧困が、貧困によってもたらす事象というのが、いろんな事象がある。例えば、お家から食事を作ってもらえないので、子ども食堂とか、塾に行きたいけど、お金がないので、無料塾とか、いろんな、貧困がゆえにそういった事象を解決していくということで、その中でいろんな事業をやっていてんですけども、敢えて何か課題というのが、もしあればね。例えば、もっとお金が欲しい、人が欲しい、これはどの事業にもいえることなので、それ以外について、例えば、仕組みがもう少しこういう仕組みがあったらとかいう、敢えて課題があるとすると、急に質問しているので、答えられるかどうかわからないんですけど、課題があるとすると、何か課題みたいなもの、ちょっと、ぱっと思い浮かべた時にでいいんですけど、ないんですかね。ちょっと急に言えなくても、もし課題があるんだしたら、それを整理していただきたいということですよね。いずれにしても、いろんな課題が出てくるはずなんですよ。例えば、食堂とか、そういったものについて、余りにも面倒を見すぎるがゆえに、だんだんその子の家庭の親がそれに頼りすぎて、余計、怠慢になって行くとか、やりすぎるとまた困るとかいうことが出てくると思うので、その辺についての課題をちょっと整理していただきたい。それから、さっき貧困がゆえにもたらす事象というのを話しました



けれども、最近よく虫歯の話が出てくるので、これも元をただと貧困から出てくる子ども達のほうが多いのかなと、親が基本的にはお家で歯を磨く習慣を付けることが一番の方法なんですけれど、そういったことをしないとかというのは、家庭から出てくるのかなと、それを学校で、今、虫歯予防のための歯磨きはやっているんですけど、最近、議会でよく出てくるフッ化物洗剤です。そういった部分を学校でという話があるんですけども、只、これについては沖教組のほうで反対をしたりとかですね。いろいろと賛否両論があるんですけど、今回の議会では、それについては危険ではないという那覇市の方針で議会で答弁していますんで、問題が無いというんだったら学校でやったほうがいいんじゃないかという話になるので、あのう最近、新しい教育長制度になって、総合教育会議も出てきて、教育委員会ですね。市長部局に沢山友達が出来ているんですよ。こどもみらい部ね、福祉部、最近、健康問題ということで健康部ともお付き合いを始めました。年明け早々、健康部のほうと話をして、フッ化物に限らず、学校保健というのがあるので、これは学校の養護教育も含めてどういう体制で、学校保健というものに取り組んだらいいのかということ、この中に当然、フッ化物の洗剤が入っていますので、天妃小学校でやっているということで、その状況を聞きましたので、学校保健というものについて、今後、健康部とまた調整をしながら健康部長にも、引き継ぎ事項としてちゃんと残してあるので、ちゃんとやっていただきたいということで申し入れしていますので、学校がプラットフォームということでということで、全然異存ないんですよ。只、学校だけが出来ることは全くないのでいろんな所と連携をしながら、学校で出来るもの、そういったものを協力しながらやっていただきたいなということがありますので、この貧困の問題についてもいろんな事象が出てくるはずなんですので、これがいろんな中でね、これが貧困につながるなということを整理しながら、今後、教育委員会もやっていきたいなと思っています。是非、ご協力をお願いしたいと思います。

城間市長

私も意見を挟みながら自分の意見を話させていただきたいんですが、今のお話に絡んでですね。虫歯は栄養面もあるんですよ。歯を磨いたからだけではなくて、元々、体の身に何を口に入れて栄養化していくかによっても、歯の強さは変わってくるんです。そういう意味では影響があるのかも知れないなと私は思いますね。学校保健委員会は、年に何回か開かれるのが義務となっていますので、その時には、健康診断の結果、虫歯の結果、う歯の率とか、治癒力とか、全部、学校養護教員が提供して、3種含めてやることになっているので、そういったあたりに、今のような子どもの貧困に係る、或いはその親力の偏りによるということが見えてきたら、それも学校の課題として、学校側が捉えていただけるといいなというふうに思いますね。

渡慶次教育長

ちょっと、付け加えてよろしいですか。よくこれは学校がやるべきだとかかという話をよく聞きますけれども、歯磨きについては、学校に入る前からの作業ですので、

是非、家庭でやるべきものというのを啓蒙しながら、やっていただきたいなということですので、これは学校関係ではなくて、福祉部、みらい部、子どもの小っちゃいころからの作業ということで、啓蒙をやっていただきたいなということでございます。

城間市長

要件のもう一つ、親力という言葉があるんですけど、まさに例えば、学校給食についても、何についても、親の力を奪ってはいけない、添いではないかという懸念もありながら、学校教育も関わっていると思うんです。その根本の部分である奪いたくない、親としての力を付けさせてあげたい、持ってほしい、矜持を持ってほしいという気持ちは、私はあります。例えば、児童館に日曜日に500円を持って、朝から晩までいる子が居るらしいんです。この状況を見て、オイ、日曜日、家庭の日、親御さん、両親は仕事なんかだと、そこまで考えたら親の代わりに見る大人が居る児童館に来るのは、まだ良いと思うんですよ。私の考え方として、基本、親がやるべき、或いは、親が出来なければ、次の大人がやるべきということで、みんなでつなぎながら最終的にこの子が社会性を持った人間に育つようにという思いがいつもあるものですから、でも、そのスタートの時点で、比嘉委員がおっしゃったように、いわゆる親の力がまだ付いていないと、親としての力が、親力を持っていないという子に対する支援というのは、やはりどこかで体制、支援を持っていかなければいけないんだろうと、それを誰がやるかということなんですが、然るべき、その親が関わっている然るべきところ、保育園もというんですが、子どもを真ん中において学校も親と向き合っているわけですから、お互いに学びの機会だと思えます。誰がやるなんとかではなくて、そういったところで私たちもですが、親の力も付けていきたいなという願いです。思いが私もあります。私も意見を言わせていただき、ありがとうございます。司会に戻ります。いかがでしょうか。はい、どうぞ。

神村委員長

今、親の力というのが出てきましたけれども、現場にいる時には、朝ご飯を食べなくて、朝食を欠食して、気分が悪くなって保健室に行った時に、養護教諭が一番最初にやったことは、牛乳を飲ませたり、それからちょっと黒砂糖の温かいのを飲ませたりとか、そういう現物付けることから始めました。給食の残りの何個かある牛乳をいつも保健室のほうに回していたという現実もあるんですね。ですから、そういう、城間市長がおっしゃったように親の力というものが一番大事で、孤立していると言いますかね。親の引きこもりが結構いらっしゃったりしますので、この相談支援員がその親御さんの、その精神的な環境を整えてあげることが出来ると、今、私は思っているんです。ですから大変、良い制度かなと思いますし、この支援員の皆さんが何処につなげればいいのかということ、してくださったら、今まで孤立していた人がどんどん自分のこの環境が広がって行って、力を付けていくと思うんです。そういう辺りにも子どもだけではなくて親も見ていると思っておりますので、是非、支援員の方々は、そういう親の状況を学校に報告するというのも、そういうものも連携しながらやってい

くと、だいぶん深まっていくんじゃないかなと思います。学校から始まって、学校につないでいって、専門機関につなぐというのを、どんどん増やして、つなげていくということが一番大事かなと思います。もう支援員の皆さんには、ご苦労ですけれども、この辺まで頑張っていたきたいと思いますね。以上です。

城間市長

ほかにいかがでしょうか。今、子どもの貧困対策については、冒頭で、こどもみらい部のほうから、大枠を説明がありましたけれども、まさに、各関連部・課が横軸でつながって、庁内に協議会を持っているということで、本当に垣根とか扉もなく、見える動きでやってもらっています。それはもう教育委員の皆さんにもそれはよく見えてくださっていると思うんですが、そういったことを先程は、報告会でお話もあつたんですが、支援員の皆さんも点・点・点と活動して行って、不安の中にやっているの、それをお互いに情報交換をする、横つなぎをする、進みながら横をつないでいくというふうなことで、そのポイント、ポイントで報告会を持って、じゃー、その次に何をしたらいいよねということで、階段を登るように恐らく充実したものになるかと、私は期待をしているところであります。本仲委員がおっしゃった、プロジェクト推進基金のことですけれども、本当に、今、10億円を頂き、4億円を頂きということで、かなり大掛かりに頂いているんですが、これを年にそれだけのものが、今後、使えるようなことがあるかと言うと、今の案では心細いものがあります。ですから、これも社会的に私どものほうは、あちらこちらにPRをする担当だと思っていますのでやっていますし、庁内でも毎年いくらということで、勿論、議会事項になるんですが、それを予算として計上して積み立てをしていくということを考えております。現在、2～3百万でしたかね、2百万位のふるさと基金が、そのほうで1億7千万程あつた中に、那覇市のどの部分にということで、子どもって部分の中から、3千万程来年度は積み立てていこうという、今はまだ予算段階なので議決したわけではないので、はっきりしたことは申し上げられませんが、その様な流れも寄せて貯めていく、寄せて貯めていく、社会からもいただくというような形で基金を増やしていこうというふうに考えているところです。是非、委員の皆さんも外向けに、勿論、那覇市も、県も勿論やっていますが、那覇市もこのような取り組みしていますよということを、どちらかでつぶやいていただきたいなというふうに思います。つなぎをしましたので、ほかに、どうぞ。

渡慶次教育長

貧困の連鎖を断ち切るという話をよく聞きますけれど、貧困の連鎖を断ち切るということはどういうことかと言うと、今、貧困家庭に育った子どもが大きくなって、貧困じゃなくなるということですよ。ですから、非常に長い期間が必要だと、その今貧困家庭に育った子供が社会に出て、貧困ではないということは、ちゃんと働くようになるということですよ。それを今度さかのぼっていくと、やっぱり働くためにはどうしたらいいかということになると、やっぱり教育ね。只、それが、学力が高いか

ということではなくて、スポーツができる子はスポーツの方向に行くし、或いは、現実に出来る子は、例えば、音楽ができる子は音楽に行くし、勉強ができる、学力が高いということだけではないはずですよ。でも学力が高ければそれなりの大学を出て、それなりのコースに行く、そういう方法もあるので、これはやっぱり教育委員会、学校としては、学力を高めるというのは、これはひとつ重要なことですよ。スポーツ、それはクラブ活動から始まるかも知れませんが、スポーツのやる子の良いところを伸ばして、スポーツのほうに進めてもらおうと、だから教育委員会、学校の中でやること、先生方がやることというのは、この子の特質、良いところと言うのをちゃんと見極めてそれをほめてあげて伸ばしていくという、それが学校の先生方がやる、或いは、学校の先生方ではなくても、周りにいる大人が、この子はこれについては優れているねとか、お家に居ると親がこう優れているなとか、そういうことを見極めて育てていくことだと思うので、やはり、学力を高める一つの方法として、今、小中一貫教育をやっていますけれども、小中一貫教育をやる中で、学力だけではなくて、いじめとか不登校、不登校が段々減っていくという一つの例として、いじめも一番多いのが、中学校1年の時と言われているので、やはり、中一ギャップというのを無くすことが、小中一貫教育の目的でもあるので、いじめをなくすことによって、不登校もなくなる、いろんな連鎖があるので、やっぱり学校に来てもらうという作業を学校はやらないといけないので、教育委員会がやることと言うのはいっぱいあるはずなんですよね。だから、この教育については、貧困の連鎖を断ち切る、やはり学校が頑張っていたきたいということもありますので、ただ、学校だけではなくて、うですけど、皆さん方のご協力をお願いしたいということです。貧困の連鎖を断ち切るために時間が必要ということです。

城間市長  
本仲委員

何で小さいうちからという結論ね。はい、どうぞ。

やっぱり、この貧困の対策については、若いうちから早い段階から手当てをしていくというのは、凄く大事だと思うんですね。この貧困問題については、しいて挙げたら、この子の将来が、いわゆる左右されないようにということと、貧困の、今、話をした貧困の連鎖を断ち切るというのがありましたよね。この辺で、ちょっと考えていることは、昨年12月21日に中教審の答申が出たんですね。そして小学校は平成33年からということになっている、平成29年度は小1決定、そして平成30年、31年は、いわゆる一方処置の期間、次の年から全面実施ということになるとですね。学習指導要領というのは、大体、10年に1回位改定されていくと、だから文科省はこの10年後の子どもの将来の姿を見ないといけないというようなことを言っているわけですよ。そうすると、この子供の貧困対策についても、今、6年間というこの時限的な制度であるんだが、この10年後の子ども達の姿というものが、凄く大事じゃないかなと思うんです。例えば中学3年生が10年後というと、23歳ですか、高

校1年生が10年後という26歳、そうすると、当然、結婚をして子供が生まれてというような形になってくると思うんですが、やっぱりこの大きな10年間というスパンで、やっぱりこの貧困対策の事業を充実させて効果を出さないといけないんじゃないかということ、この間、答申が出た時に、概要を読んだ時に、貧困の問題と絡めて、ちょっと頑張らなければいけないんじゃないかなという感じはしています。

城間市長  
比嘉委員

はい、どうぞ。

学習意欲と言うか、貧困と直接つながるというわけではないのですが、学習を上げるということでの、先程、歯医者の話、歯科の話だったんですが、私たちが、今、一番課題にしているのは、子どもの視力の問題です。日本は小学校で以前の視力検査が無くて、子どもの視力の固定は、6歳と言われているにも関わらず、その前の検査が無いというのが、実は学習障害ともつながるんじゃないかと思っていて、今、そこを重点的にいろいろとやっていて、我が娘が3歳の時に結膜炎になって、眼科に行った時に遠視ですよと言われたんですね。そこで初めて解って、彼女は視力の矯正をして、今、近視にならずに至るということはあったんですけど、こういうことは実は多いですよと、眼科の先生のお話でした。結局、見える、見えないは、本人だけの問題なので、本人がそう見えていたら、ほかに正しく見えていても、見えるということが解らないわけですね。だから子供から見えないという訴えは無いと言われるんですよ。なので、すると実は、1年生の段階で黒板が見えてない子どもが多いんですね。黒板が見えてないということは、学習意欲の低下につながる、勉強したいけれども勉強が出来ない状況が、実はもう早い段階から出来ているのではないと言われるので、その就学前以前の視力検査に関する導入を今後、教育委員会でも検討したほうが良いのではないかなと、ずうーとこの2年位思われていて、私の経験から指導して眼科に行かせて、眼科矯正に入った子が、我が家でも何人かいるので、やはりこれは増えてきている、環境が、このゲームの環境だったりとか、目を使わない環境辺りが増えてきているので、早い段階からのこの学習意欲につながるための眼科矯正を、今後、那覇市は検討していただけたらなというのが、私のほうの、経験からの想いなので、検討課題に入れていただければなと思っています。

城間市長

就学支援の項目に、眼鏡のどうのこうのというのがありましたよね。入りましたか、就学援助費に、まだ入っていない。質問がかなりあるんですが、今、テレビの宣伝で、眼鏡屋さんの宣伝で、実は見えなかったんだよと、友達も、黒板の字も見えなかったんだという宣伝があるんじゃないですか、やっぱり、視力も低年齢化しているという現実もあるんだろうなと、今話を聞いて改めて思いましたね。

渡慶次教育長 いくつまでが。

比嘉委員

6歳で固定すると言われるんです。その前に矯正してくださいと言われたんですね。でも、お医者さんによれば7～8歳までは大丈夫だろうと言われるんですが、そ

こからまだ気付くというのが遅くなるじゃないですか、見えるのは自分しか解らないので、実は見えていなかったという。

神村委員長 幼稚園は視力検査は入っていませんでしたかね。解らないと言いますよ。その判定が難しいと、幼稚園の場合は、それで判定の怪しい子は、眼科に行かせるような指示はしていると思いますよ。幼稚園はですよ。公立の幼稚園は。

比嘉委員 幼稚園は、もう5歳、6歳なので、本当は保育園位から解ればいいのかなど思っています。

本仲委員 これは学校では、直ぐ出来るような話ですよ。6月までは視力検査とか、そういうものはやるわけですが、やっぱり隣接している所が多いのです。

比嘉委員 只、小児眼科の先生が少ないんですよ。大人の眼科の先生でも解りにくい、小児眼科先生の範囲なので、小児眼科の先生は非常に沖縄でも少ないんですね。なので、ここは課題だと思います。

城間市長 実はそうなんです。今、那覇市も抱えていましてですね。小児眼科で特別な、その特に未熟児であったり、産科と連携をした子どもの視力について判定をし、見ていただけのお医者さんが県下に一桁、二桁、居るかいけないかと言う話を聞いたことがあります。はい、どうぞ。

饒波委員 ちょっと話は違うんですが、ちょっと質問なんですが、例えば、教育相談課には寄り添え支援員というのが居るわけですが、やっぱりこういうような支援については専門家が凄く必要だなど思っているわけですが、今、沖縄県では例えば専門家と言われている社会福祉士とかですね、そういう人達は何名位居るんですかね。圧倒的に少ないというふうには聞いてはいるんですが。

城間市長 資料2の1ページにありますように寄添い支援員とか、子ども自立支援員とか、那覇市では支援員には資格、採用に関する条件ということで、このような何士、何士とやっていて集まっていたいてはいるんですが、具体的にどなたか、数字ご存知の方はおられますか。今、直ぐには解らないね、はい、どうぞ。

学校教育部 具体的な数字はないんですけども、寄添い支援員18名なんですけれども、有資格者は5名です。

比嘉委員 社会福祉士の応募の数は多いんですけど、現場で働いて経験を積むという所は、多分、少ないと思うんですね。

本仲委員 社会福祉士の資格を取るにも、やっぱりそれだけの年齢、いわゆる期間が必要ですよ。大学に行ったりね。だからこういうふうな人たちを、今後、増やしていかなければいけないんじゃないかなというふうなことを考えますね。

比嘉委員 眼科の件もそうなんですけど、情報があれば、一緒にいる保育士だったら気付くと思うんですよ。だから小児眼科の先生にお話ししていただいて、保育士が知識として入っていれば、見方がちょっとおかしいかなとか、変なお顔をするなどかというの

で、気づきがあるのでそこからでも、多分、凄く変わると思います。歯医者の方も含めてですね。

城間市長

あれっと思った時に、そのまま目を逸らすんじゃなくて、あれれ次のステップまで確認まですればということですよ。有資格者の件も課題として出ましたが、そのあたりも恐らく保育士の件も、那覇市は非常に集めるのが大変ということで、それからテストを受けて資格を取ってもらうとか等々で保育士不足も課題になっています。まさにそれが全て人材ですよ。いろいろな人材が必要とされていて専門性が必要、人材が必要とされているこの社会で、如何に那覇市としてその人材を呼び戻せるか、集めるかというようなものも考えなくてはいけないと、彼らも生活しなければいけないのでということで、お給料の面であつたりとか、本当に次ここをクリア出来たらその次、次、次と明らかに課題が見えてくるので、それを逃げずに終点と言うのは無いような気がするんですが、これがいいと言う、ベストではなくても、ベターな方向で教育委員会も、そして市長部局のほうも知恵を絞って、対応を今後していきたいと思っております。今の課題を、お話をいただきました。

饒波委員

今の話じゃなくて、市長の事務局から誰が気付くのかということなんですけど、先程の学校のプラットフォーム化も、結局は誰が気付くのかということですよ。要するに学校が一番気付きやすいということで学校にプラットフォームするわけなので、只、今、比嘉委員の話によると、その情報さえ共有しておれば、誰でも気付くというようなことなので、そういう人材をどうやって増やすか、或いは、そういう情報をどうやって皆で共有するかというのが凄く大切で、それは誰でも、恐らく、今、比嘉委員が言おうとしたことは、誰でも出来るくらいのそのスキルを持たなくても出来るような、普通の、一般の、地域の人でもわかるような、そういう情報を落とし込んで皆で共有すれば、皆でピックアップ出来るということですよ。それで、先程、渡慶次教育長がおっしゃったように、例えば教育委員会ですと小中一貫教育、大きな、後、2学期制とかですね。一見ちょっと貧困と関係ないことでも、それで貧困というフィルターを通すと、どのようなことが見えてくるのかとかですね。例えば市民文化部とかですと、学校のマンスリー協議会とかやっている、そこで貧困のフィルターを通して何が聞こえる或いは防災課が何を言っているのかという、いろんな課でその貧困、子どもの貧困とか貧困と投げていて、そこからどういうものが見えてくるのかということで、情報をもっと落とし込んで、誰でも共有できるような情報にして、市民に交付するというか、それで皆でピックアップするという、学校の先生が一番大変だと思うんですけど、皆が一人一人が子どもに気を使ってピックアップするような情報を抽出出来ればいいのかというふうに思いますね。

城間市長

今、チラッと街づくり協議会の話が出たんですが、那覇市では、今、36小学校区街づくり協議会を作っていたけど、これは作りなさいではなくて、作りましょうとい

うところで、今年も曙さんと仲井真と、手を挙げてくれて少しずつ広がりつつありますね。広がりつつあると言うのは、先行して頑張ってくださっている、与儀さん、銘苅、街づくり協議会の皆さんとかが、非常に成果を出してくれているということも挙げられると思います。そこでおっしゃるように子どもの貧困について、例えば、話題にして、いろんな我が町、地域はどうしようかと言った時に、民生委員の皆さんもいらっしゃるし、いろいろな形で自治会の皆さんもいらっしゃるし、いろいろな形でサポートが出来てくる体制が基本的に作られていくのかなど、その基本体制として、街づくり協議会というのがあってほしいなというふうに私も願っているところです。これもお互いに共通した認識で持っていたいなと思ひまして改めて申し上げました。なるほど、今の、饒波委員のその都度、そのたびごとに、これは縦割りではなくて、うちはこの部分だけで関係ないのではなくて、知っておくということは必要だということですね。大きな情報です。各部局の皆さんでこれを言い忘れた、これもアピールしたい、PRしたいというようなことがありましたら、遠慮なく手を挙げてください。はい、どうぞ。

渡慶次教育長 さっきの話とちょっと被る所もあるんですけども、貧困家庭に生まれた子どもは決して貧困ではないんですよ。あらゆる可能性を秘めた才能のある子ども達というのはいっぱい居ると思うんですよ。生まれた時には、皆一緒ですからね。条件は。只、環境が違ってくるという話なんですけど、子ども達、我々も本当はそうだと思うんですけども、生まれた時に、皆、ある才能を授かって生まれてきている。それを気付くか、気付かないかで、この人の人生は大きくなる。以前、校長先生の前とか、一緒に研修でもお話しするんですけど、具志堅 用高が、もし、ボクシングの道に行かなかったらどうなっていたか、彼はボクシングの才能というのを自分で見つけて、大成しているんですけど、誰でもいろんな才能がある、これを見つけるか、或いは、自分で気が付くか、或いは、周りがこう教えてあげるか、発達障害の子どもって、非常に優秀なある特定の才能を出す子どもがいるんですよ。ですから発達障害、障害と言う言葉は非常に違和感を、感じる人が沢山いるんですけど、デコボコと言っていましたね。この発達のことを。発達障害の子ども、この子ども達の才能を生かして、社会に送り出すと、相当、社会に貢献できるような子ども達っていっぱいいると思うんですよ。それを見つけて育ててあげるのが、また教育委員会、或いは、周りの人達かなという感じがしますので、先生方によく言うのは、子ども達をじーっと見ていてくださいと、ある時、何かピカッと光る瞬間を見逃さずに、成績が良い子とか、そういう子ども達は、ほっといても成績が良いんですけど、この子をほったらかしにされている子ども程、よく見ていてくださいと、何か光るものがあれば、褒めてくださいと、その褒めたことを通信簿に必ず書いてくださいと、褒めることによってこの子どもは凄く伸びますよと、そういった子ども達が社会に出て、充分働けるようにな



るということは、さっきの話とちょっと被るのは、これが貧困の連鎖を断ち切るその子ども達、本人が出来ることなのかなという感じがしますので、だから、こどもみらい部とよく付けたなと思いますよね。まさに子どもの未来を考えると、小っちゃい時から子どもの才能を周りが見つけてあげることが、僕らが出来ること、それを見つけれたら、辻井 伸行君って、ピアニストってわかりますか。この話をよくするんですよ。全盲、生まれつき全盲、だから光さえ入ってこない、彼は生まれた直後に、このお母さんピアノが好きでCDを流していたらしいんですよ。ピアノが好きなので、子どもに、彼に、2〜3歳位の時に、おもちゃのピアノをあげたら、この曲に合わせて引き始めたと、まさかと思って、ピアノ教室に連れて行ったら、メキメキと言う言葉が聞こえるくらいメキメキと、彼は生まれた時にピアノという才能を持って生まれて、そのお母さんが見つけた、お母さんが偉い、彼がもしピアノというおもちゃを与えられなかったら、普通の青年になっていたかなんですけど、このピアノという音感を見つけた、このお母さんはとっても偉いなど、だから周りがいかにして子どもの才能を見つけてあげるかというのが、我々の仕事なのかなと、ですから皆さん方のご協力を宜しくお願いします。

城間市長 はい、どうぞ。

神村委員長 教育の話が出ましたので、いっぱいになりました。そうすると、教育がとても大事だということが、今、渡慶次教育長のほうからあったと思うんですけども、こんなに環境が、今、手助けできる環境が増えてきた中で、じゃー、子ども達はどうすればいいかということは学校教育の中で、自分の夢を育てる、なりたい者になりたい、なりたい者のために、常に努力する子どもを育てることが、学校教育の中でとても大事になってくるかなと思うんですね。だからキャリア教育当たりの充実を、本当に現場で努力したり、今、やっていますけれども、そういうことを深めていく、広げていくということが、今、どんなに大事かなと、渡慶次教育長の話を聞いて改めて思いました。

城間市長 那覇市では、今、こどもみらい部のネーミングのお褒めの言葉をいただいたんですが、子どもの貧困対策という言葉は、国や県が使っているので、事業面としては取り除けないんですが、基金のネーミングも、「こどものみらい応援プロジェクト」、子どもの未来を応援するためのプロジェクトというふうに、前向きに、肯定的に使わせていただいております。さて、まとめと言う言葉で、願いをというような言葉で渡慶次教育長、神村教育委員長、委員の皆さまからいただきました。今、ご意見をいただく中で、こうしてほしい、こうしたらどうかという案件もありました。支援体制であったり、或いは、こういうふうに今後持っていったらどうかということであったりとか、或いは、こういうことが抜けているんじゃないかというようなところも、ご指摘がありましたので、取りまとめて、それぞれの部で引き取る部分も、引き取らせて

いただいて、今、覚醒ではなくて、私たちのやる気を今、叱咤・激励をいただいたというふうに思いましたので、今後、この本日の会議の成果として受け取っていきたいというふうに思っております。「平成28年度第1回那覇市総合教育会議」を、これにて終了させていただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

全員 異議なし。

城間市長 お疲れ様でございました。ありがとうございました。